

<随 想>

## 続・ウィーン断章(二)

藤 井 忠

### ——消 え ゆ く 人 々——

ウィーン市北部の一角、カーレンベルクを見渡す小高い丘ホーエ・ヴァルテ。その高台の突端に、シュタインフェルトガッセがある。百米余りの短い通りで、片側には、今世紀初頭にヨーゼフ・ホフマンの建てた邸宅が三軒並び、そのひとつが、グスタフ・マーラーの妻アルマが三番目の夫フランツ・ヴェルフェルと住んだ、マーラー・ヴェルフェル・ヴィラである。アルマはここに1938年まで住んだという。かつて、著名な文学者や芸術家を集めたこの家は、いまは、サウジ・アラビア大使館の建物となり、玄関には警備の警官が配置されている。たいていひとり、所在なげに立っていて、それが人影のないシュタインフェルトガッセをいっそうひっそりしたものにしていた。

この短い通りが終わろうとするあたりに、十年前私たちが二年間を過ごしたアパートが一際つつましく立っている。市電G2(いまは37番)の終点で降りて、初めて、ホーエ・ヴァルテを訪れたとき、まず眼前に広がるウィーンの森の風景に目を奪われた。それは息苦しいほど間近にあった。そして、自分の右手の、ユーゲントシュティールの白い三階建ての家に気づいた。薄曇りの空の下で、アルマの家は建物の細部をくっきり示していた。舞台の書割を前にしているようであった。自分がこの通りに住むことになろうとはそのときは思ってもいなかった。やがて、ここに住居を得て、シュタインフェルトガッセを行き来するようになる。ウィーン大学日本文化研究所で授業を担当していたので、この都市で働き生活する者として鞆をかかえて家を出ていた。しかしそうした格好で歩いていても、やはり二年間の滞在者であることに変わりはない。日常の生活に、日本のそれとは違う、空白があった。日本

ではあまりないことだが、よく空を見ていた。

北の窓からは、ウィーンの森一帯が一望の中にあった。居ながらにして、四季の変化がたのしめる。しかし、先程まで穏やかに山々を映し出していた空が、突如薄闇につつまれて雹の大群に襲われた11月のある午後のように、荒々しい天候の急変を目のあたりにすることもある。ホーエ・ヴァルテ(高い見晴し台)の地名そのままに、最上階の屋根裏部屋風のわが部屋は、まさしくウィーン北端の物見櫓であった。陰鬱な灰色の空を日常の基調とし、時に生じる急変。屋根と壁の隙間でうなる、夜の風の音。日々、そういう現象の細部にとらわれていて、何かある不安が、心に溜らぬことはあるまい。

そして、この小さなアパートには十四所帯が住んでいた。その多くが、年金生活の老人たちで、家のなかには独得の静寂が支配していた。エレベーターがないので階段で顔を合わせることがある。シュタインフェルトガッセで出会って丁寧に挨拶をかわす。日常の些細な会話において、彼らの語る言葉は、生の嘆息のようにも聞こえた。

十年が経ち、いまや、そうして言葉をかわした人々からの便りも、絶えんとしている。当時すでに70歳前後のお年寄りたちであったことを思えば、これは自然の経過なのだが、便りが来なくなるにしたがって、あの家そのものが、しだいに、沈黙のなかに閉ざされていくような気がした。建物だけは、あの丘の縁で黙々と、ウィーン北端の見張り役を果たしているような気がする。

まず、一階に住む太ったホームン夫人の音信が絶えた。地下室にある共同の洗濯場で妻が大きな肩をちょっと揉んであげた。その礼を言い、夫人は不自由な身体を四階まで運んできたが、苦しげに息をする彼女と話したのが、唯一の会話だった。ポラック夫人は、

若い頃は舞台女優で、初めて舞台に立った時の母親からの手紙を大事にしまっていて、それを読んで聞かせてくれたが、もう便りがない。病弱ながらもまだしっかりしていたマイヤー夫妻にしても、数年が経過したあるときから、突然、手紙が来なくなった。そして、以前、「ウィーン断章」に書いた、元学校の先生のフラウ・プロフェッサー・マテもそのひとりである。彼女はあのひっそりしたアパートのなかでは異色の人だった。当時すでに70歳だったが、身体は頑健で、文化的知識を伝えることについてその熱意はすこしも衰えてはいなかった。しかし、ずっと便りがないので、よく行き来していたマイヤー夫人に問い合わせた。夫人は、マテさんの頑固さが彼女をアパートのなかで孤立させることになっている、と書いてよこした。そのマイヤー夫人からも通信が絶え、しばらくして、マテさんの昔の教え子で、女子高校の先生をしているマルコさんからの手紙に、マテさんは山のなかの有料老人ホームに入っており、訪ねて行っても、「もう分からない」と書かれてあった。

その間に私の方にも変化があった。ある日、81歳の父が足がもつれて会社の階段より落ちて以来、わが家は突如、老人問題をかかえこむことになり、老いと死が身近になり、また私自身が、すでに初老の域に入ったことを折りに触れて自覚しなければならない年になっていた。

したがって、二度目のウィーン訪問に際して思ったことは、ひとによっては、もしかすると今度会うのが最後になるかもしれないということであった。

そういうわけで、十年振りにウィーンに来て、マルコさんの住居を訪ね、七十半ばを越えたお母さんの元気な姿を目のあたりにしたときの喜びは言い表わしがたい。マルコさんのお母さんは、マルコさんを生んで数年後、第二次大戦の初めに御主人を戦争で失い、それからずっと娘と二人で生きてきた。このウィーンの年老いた女性の、こまやかな心遣いと繊細な感情はウィーンの陰鬱な空気と溶けあって、懐かしい印象を残していた。マルコさんのお母さんは、以前と同じくこまやかに、臆病なくらいに日常の事柄に心を配っていた。生への不安、とそれを言ってよいか。その不安を女性的なものがつつみこんでいた。軍人だったお父さんに似ているらしい、すらりと背の高いマルコさんは、母親の小心をからかうように、ペシミスティックな雰囲気

気をわざと吹き払うように、快活にふるまう。娘は、母親にとって娘以上のものではなかったか。あるとき、マルコさんと電話で話した最後に、うっかり、奥様にどうぞよろしくお伝え下さいと言ってしまった。むろんただの言い間違えである。しかし、あとで気づいたこの間違えは、マルコさんはお母さんにとってまさに夫でもあるかもしれないと、認識させた。母親は、夫に対するように娘に対してきたのかもしれない。娘は通常の夫以上に夫でありえたのかもしれない。そのようにして、二人の生活はこまやかに日々倦むことなく営まれてきたのであろう。団欒のとき、娘は母をちいさいハエちゃんと呼んでいた。十年前のことである。今度は、子ブタちゃんになっていた。

ネメッツさん夫妻は第五区マルガレーテンに住み、御主人は寮の守衛のようなことをし、奥さんは電気器具の卸屋に勤めていた。それぞれが配偶者をなくし、再婚したのである。家計は別だと言っていた。ネメッツ氏はオペラ歌手のようによい男で、料理が趣味であるが、循環器系の障害に悩み、妻は目を手術することだった。この十年のうちに、二人とも年金生活に入っていた。目の手術は成功したが、その後どうなのか、時折受け取る葉書ではよく分からない。しかしウィーンで再会した夫妻は粹な服装で現われ、シュタイアーマルク出の夫人は、夫の芝居がかった話振りを揶揄して、朗らかな会話は絶えることなく、遠くで案じていた者の心はふとなごんでいった。

十年振りで訪ねたホーエ・ヴァルテは、三月初めだが一週間前に降った雪をまだ所々に残こしていた。電車を降り、教会の尖塔に向かって歩き、例のマラー・ヴェルフェル・ヴィラを曲がると、そこからシュティンフェルトガッセが始まる。人影はなかった。このアルマのヴィラ、いまはサウジ・アラビア大使館の建物の玄関には、警官がいつもなら立っているはずだが、その姿も見えない。私が歩きはじめると、建物の陰からひとり現われて、こちらをしばらく眺めて、また引っこんだ。

アパートの脇には昔のままニセアカシアの木が立っている。鉄格子の向こうの庭は植物（かつてマテさんがひとりで好きなように手入れをしていた）が枯れたまま放置されていた。玄関のガラス戸の向こうも、がらんとして人気を感じさせない。玄関脇の名札から

は、マテー、ボラック、ホームンの名前が消えて、別の名が入っていた。マイヤーさんのはあったが、マイヤー宅に通じる呼び鈴を押しても、なんの反応もない。しばらく、玄関口に立って、それからそばのハイリゲンシュタット公園に出た。ウィーンの森を眺めると、カーレンベルクは霧にかすみ、手前のヌスベルクが、うっすら雪をかぶったその斑な胴体を物憂く横たえていて、なにもかも、いまなお、どんよりと重い冬景色につつまれていた。公園に残る雪は泥で汚れ、街の露地と同じように、犬の糞が黒々と方々にころがっていた。公園のなかを下へと通じている道は僅かの雪だが滑りそうな感じがした。

いま来た道をアルマのヴィラまで戻り、教会のかたわらの階段を降りた。ハイリゲンシュタットの小道を歩き、昔よく行ったガストハウスに入り、亭主のドヴォルシャーク氏と握手をして互いの生存を確認した後、彼の料理でワインを飲んだ。

やがて、マテーさんのことでマルコさんから連絡があった。第一回の訪問のときに詳しいことを調べておくということになっていたのだ。ウィーンをすこし南下したメーニヒルヒェンの「ホテル」にマテーさんは入っているのだが、お手伝いさんが週に一度そこへ行って、世話をしているが、あいにく、その女性が休暇をとってウィーンを離れているので、詳しいことはもうしばらく待たねばならないとのことだった。マテーさんのかつての教え子たちのなかで、マルコさんも含めて、見舞った者はまだ誰もいないようである。それでもマルコさんは、会っても、マテーさんは「何も分からない」はずだと言う。

ある日、市電のなかで、シュタインフェルトガッセのアパートを掃除していたタウフナー氏にばったり会った。私を覚えていて、ホームン夫人とボラック夫人の亡くなったことを教えてくれた。マイヤー夫人は病气らしい。御主人のことはよく知らなかった。マテーさんは入院している、とだけしか言わない。中肉中背の端正なその人はもう相当の年であろうが、健康そうに見えた。アパートの石の階段を黙々と雑巾で拭いていた頃と変わらぬ静かな態度でアパートの様子を語ると、市電を降りていった。

二度目にホーエ・ヴァルテを訪れたときは、三月末、

復活祭とともにようやく春の到来を感じる頃で、ハイリゲンシュタット公園が一挙に緑に覆われはじめているのに目を見張った。アパートの前では、見知らぬ住人が自動車の手入れをしていた。三十半ばの男と若い女性であった。ふと思いついて、道を下り、道路を渡り、教区の教会に行った。十年前に、この教会の人とマテーさんに連れられて、アム・シュタインホーフ（20世紀の初めに創設された市立の精神病院。60の病棟があり、丘の上にはオットー・ワグナーの教会が立つ）に教区の患者を見舞いに行ったことを思い出したからである。クリスマスの時期だった。患者のひとりアル中を治すために入院している中年の男性で、もうひとりとは別の病棟の小柄な老女で、鼠色の服を着て、広い廊下の向こうからひとりで歩いて来た。彼女は私がついて来たことに驚き、殿方が一緒なら、もっとちゃんとした服を着て出たのにと、何度もそう繰り返して、私の手を握り、教会の贈り物のキャンディーをしきりに私にすすめた。帰りの自動車のなかで、マテーさんは、あの女性は一人暮らしをしていたが、火の使い方などが急に分からなくなって、危ないので入院させたのだと語ったが、いまにして思えば軽い老人性痴呆症であった。そのマテーさんについて、教区教会の事務所で尋ねてみようという気になったのである。事務所の女性はあのとき一緒にアム・シュタインホーフへ行った人ではないが、私のことを知っていると言いながら、名簿を調べて、マテーさんのいる「ホテル」の住所をタイプで打ってくれたが、それ以上のことはやはり分からなかった。

日本で一度会ったことのあるマテーさんをシュタインフェルトガッセの家に訪ねていったのは、1975年10月のことだった。最初の訪問のときマテーさんのすすめる強いリキュールを飲み、ウィーンの森の荒い風に当たり、ひどく消耗してホテルに戻ったが、その辺のことはすでに「断章」に書いたので繰り返さない。マテーさんのもっているある農民的タフさとウィーンの風に接し、へとへとになってしまったのだ。これが私のウィーン滞在の開始だった。思いがけぬ側面からウィーンを感じさせられた。優雅な古都のイメージと反するものであったが、しかしこの都市のものであった。

さて、この訪問の際、まだ住居が決まっていなかった私は、そのような話もなんとなく彼女にした。ところが、一週間ほど経った頃、同じアパートの一室が空

いたという連絡があり、行ってみると、マテーさんのすぐ上の最上階の部屋が空いて、入居者を探しているということであった。不動産屋の大柄な男も一緒だった。ヘル・ドクトル……と紹介された。北向きで広くはないが、窓いっぱいウィーンの森の山々が入ってくる。東の浴室からは、遠くにドナウ川沿いの道路が見える。家賃は前任者から得ていた情報に従うとすこし高いが、とっさに入ることに決めてしまった。しかし、数日が経ってから、マテーさんから電話が掛かってきて、契約書に署名するのは待てと言う。アパートにもうひとつ別の、家賃はすこし高いが、南と北に部屋のある条件のよい住居が空きそうだということである。このふたつの住居は別の不動産会社が管理していることから、事は簡単ではなかったが、私のそうした憂慮にたいして、しかしマテーさんは、心配しなくてよいと、にこにこ笑いながら断言した。親指をなかに入れて拳をつくり（成功を祈るの形）、あなたもこうして祈っていればよいのだ、と言う。それから、新しい住居を管理する不動産会社のM……氏に会い、この上品な風貌の紳士（しかしドクトルはついていなかった）がすべてを処理してくれたのであるが、一方のあの男のヘル・ドクトル某からすると我慢ならなかったと思う。不満を述べるかなり長い手紙が来たが、別に実際上の補償などを求める文は記されていないかった。こちらで埋め合わせを少しでもしたいと思い、しばらくしてちょうどよい入居者を紹介することができた。久しぶりに会うヘル・ドクトル某は、笑みを浮かべて握手を求めてきたが、どこか身体の具合でも悪いのか、頑丈そうな肩のあたりが大きく波打ち、笑いにも力がなかった。四階まで登ってくるのは疲れると言った。あのときのマテーさんの、多分不動産の知識とは無関係のにこやかな悠然たる態度と、この武骨な不動産屋さんの生に疲れたような表情は心に残った。

ところで今度の住居にそれまで入居していたのは、中東の男性で、芸能プロみたいなことをしているらしく、夜の12時を過ぎてから友達を連れてきて騒ぐし、鍵を誰彼の区別なしに貸して、共同宿泊所みたいにしていたので、たまりかねた住人が住人会議を開いて、退去を勧告したのだそうである。そのとき後に入る候補に、マテーさんが私を推薦してくれたようである。住居のことでその男を訪ねたとき、彼はけだるそうな表情を浮かべて遅い朝食をとっているときで、レバノンだと夜は12時から騒ぐんだが、ここの連中はまった

くひっそり暮らすばかりで、これは生活ではない、と言って肩をすくめた。奥さんはウィーンの女性で、ブーツをこつこつ言わせながら、小さい女の子と一緒に部屋のなかを歩きまわり、備付けの家具や掃除機などの器具類の説明をひとつひとつしてくれた。私たちが歩いているそのすぐ下は、病弱で神経質なマイヤー夫妻の部屋であった。

こうして新住居に移り、ほっとしたが、マテーさんはもっと積極的に考えていた。休みのたびに、彼女の古いフォルクスワーゲンに私をのせて、オーストリアの各地を走りまわり、教会建築や町並みについて、樹木と草花について講義をしてくれたのである。それはいかにもマテーさんらしいもので、何か土臭く、農村物語の匂いがしていた。あるときは、下部オーストリアのチェコに近い農村にいる彼女の姪一家を訪ね、村の青年たちの宗教劇を観てからワインを飲み、子豚の丸焼きを食べ、それからさらに、夜の11時頃、ケラーガッセ（農家が自家用のぶどう酒を貯蔵する穴蔵の並ぶ所）へ行き、穴蔵で新酒を飲んだ。ゆるやかな起伏を見せて畑の広がる下部オーストリアの農村に立ったマテーさんは、終始にこやかに、風景に溶け込んでいた。しかし私には、この農家のワインはいささか強すぎるようだった。畑を吹き渡ってくる風は、体力を消耗させるようだった。甜菜の収穫を終えた畑では、黒々とした土に葉っぱや根がうち捨てられて、何かがむき出しになった感じである。畑は彼方へとのびている、彼方はモラビアである。奇妙な疲労のなかで、この広大で単調な、眺めるものはなにもない風景に対して、深い共感を覚えた。曠野の一方には人間臭い意味を細部に蔵した古いウィーンの街があった。ウィーンの森、標高484メートルのカーレンベルクから眺めると、ウィーンの街を覆うもやが、そのままドナウ川を越え、下部オーストリアの平野へと広がっていくのが見える。もやの広がり、首都をとりまく諸地方の存在を予感させる。かつてウィーンは、はるかにより広大な諸地方の首都であり、さまざまな要素がそこへ流入したのだった。さて、こうして車の助手席に身をまかせて田舎を走っているうち、12月半ば、上部オーストリアのマテーさんの親戚を訪ねる途中のこと、みぞれの降る田舎道で、マテーさんのフォルクスワーゲンは、積雪を測る棒とコンクリートの柱をなぎ倒しフロントガラスを木端微塵にして牧草地に突っ込んだ。二人とも怪我はなかったが、彼女は土気色に顔を硬直させ、

ガラスの破片を髪に散らばせたままなおも走りつけ、私が幾度か名を呼んだあと、やっと車を止めたのである。プラスチックのカバーで前方をふさぎ、さらに車を走らせたが、パトカーに停止させられ、マターさんは警官にしばられたあげく、管轄署で事故証明をとるよう言われて、いま来た道をわれわれは戻ったが、今度は道に迷った。やっと夕闇濃い田舎町の役所にたどりつき、誰もいない建物のなかでぼつんと明かりのついている部屋で、あれこれ事情を述べて証明書を手に入れることができた。それからどう走ったか、目的の親類の家に着いたときはすでに8時近くであった。翌日の夕刻、珍妙なプラスチックのカバーで前方を覆ったフォルクスワーゲンは、ウィーンへ向けてアウトバーンを走っていく。追い抜く車のなかでは、こちらを振り返って笑っている。少し元気になったマターさんは、ハンドルを握って、前方を凝視したまま、信仰と言葉、神の言葉の奇跡を語りはじめ、しだいに異様な興奮状態へと入っていった。この神がかった状態に入っていく姿はすでに「断章」に記したので、詳述はひかえるが、事故の際の彼女の放心とこの昂揚は、オーストリアの田舎の夕闇とともに心に残っていた。マターさんのことを書きはじめると、どうしてもまたあの場面に行き着いてしまう。この事故はマターさんに相当のショックを与えていた。アパートに着いたのは夜の10時頃だった。別れ際にマターさんは、事故で心配をかけてすまなかったと言ったが、声は弱々しく、彼女のそのような姿を目にするのは初めてだった。それから、急にお婆さんになったような気がする。何日かして、私のドアの前に置かれてあった「手紙」は、今度は、お腹をこわしたマターさんが、暗闇のなかでただひたすら寝て、闇を感じていたことを告げるのだった。

やがて家族が来て、新しい相手を見いだしたマターさんはいきいきとしていた。妻にとって姑のような存在になりはしまいかと危惧してはいたが、二人の女性は、植物と動物への関心では一致し、聞き手の全く不完全なドイツ語にもかかわらず、ともかくも意思疎通は成り立っていた。しかも日常的な事柄に関する会話はついに一度として交わされることなく、いつも、草花と動物と、旅先では教会建築などにきまっていた。それは夢のようなことである。二人の間に交わされるおとぎ話をそばで聞きながら、私は時にドイツ語を、また日本語を補っていた。マターさんはドイツ語のう

まくできない者にも普通の話し方をした。語学教育を施すような、幼児相手のような話方はしなかった。いつもよりゆっくりではあったが、彼女としては伝えたいことを、そのまま話した。聞く方も、むしろ全部は分からないにしても、事柄は通じていた。

さて、山中の「ホテル」への行き方を、マルコさんが先方に電話で聞いてくれたのは、四月に入り、ウィーン滞在も残り少なくなってからである。マルコさんはいつもなら、頼み事はあっさり果たしてくれるのに、今回はどうしてか手間取っている。彼女の方に、教え子として、正常でない師の姿を見せたくないという気持ちがやはりあるためか。こちらも、老いた父の経験からそうしたことは最初から考えており、もし見舞いに行ってもよいのであれば、という姿勢は示してある。しかし今度はもっとはっきり、そのような躊躇の気持ちがもしもおありなら、見舞いは見合わせますがとマルコさんに伝えた。だが、それはこちらの考えすぎであったようだ。マルコさん自身まだ見舞いに行っていないのに、私たちが短い滞在に一日つぶして行くことに、むしろ気がねのようなものをいだいていたようである。しかしそこもあいまいであった。とにかく、「ホテル」に電話で問い合わせてくれたわけである。そしてウィーンを離れる三日前の休日、南駅よりメーニヒルヒェンへ向かうことになった。

その前日から雪が降り、冬が戻ってきたような天候であった。朝10時半、マルコさんからもらったメモ通り、田舎駅アスピングに降り、駅員に教えられて、駅前に止まっていたバスに乗った。乗客は他に誰もいない。バスはアスピングの町を出て、山を登った。容赦なく登って行って、ここで降りればよいと言われて降りされた所は、アスピングから30分ほど行った雪に覆われた山の峠だった。周囲を見渡しても、見えるのは山々のうねりのみで、再び降りはじめた雪が、彼方から横なぐりに吹きつけてくる。森のなかを下へと通じる道があるので、とにかく山を下ることにした。何分か下ると、峠での途方に暮れた気持ちからするとあっけなく、三階建てのこぎれいなホテルにぶつかった。そこがあの「ホテル」であった。車のそばで若い夫婦が出発の準備をしていた。中に入ると、子供が二人玄関の間を走り回っていた。調理場から出てきた女性に尋ねると、もうひとりの女性を呼んできた。彼女がマルコさんの電話を受けたようで、われわれの訪問を知

っていた。独得のドイツ語である。あとで、彼女はユーゴスラヴィア人だと分かった。フラウ・ドクトルはいま降りてくる、と言う。

老人ホームを、体裁を繕って「ホテル」と呼んでいるだけかと思っていたが、ここは本当のホテルで、ちゃんとふつうのホテルのように食堂とカフェが一階にある。パンフレットにも、休暇滞在者に好適なホテルとしての宣伝文句が並んでいるが、パンフレットに挟まれていた手書きのチラシには、「老人向きホテル」と書いてあり、1泊、3000円から3500円の値段が載っている。だが詳しくは分からない。先日、マルコさんは、マテーさんはお金があるので有料の「ホテル」に入れるのだと言っていた。しかし、そのお金をいま誰が管理しているのかは彼女も知らなかった。

気がつくと、カフェの入口に、マテーさんが立っていた。少し太って、のろのろした感じで、どこかあぶなげであったが、マテーさんに変わりはなかった。日本の病院で老人を見てきた経験から、マルコさんの言った、マテーさんは「分からなくなっている」という言葉で、もっと暗い事態を覚悟していた私たちが、ほっとするものを覚えた。マテーさんは、オーと声を発し、歩み寄って、長身を前かがみにしながら妻の肩を抱いた。シュタインフェルトガッセのアパートのなかの光景の再現である。ごく自然に会話は進んだ。以前と同じように、マテーさんの語るとは、このメーニヒキルヒェンの森の散歩道のことやホテルの静けさのことで、アパートの住居がどうなったのか、この「ホテル」の仕組みはどうなっているのか、という話に入るきっかけはなかった。

お昼になり、食堂に移った。レストランと同じメニューだった。少し離れた席に老女が二人坐っていた。マテーさんはワインではなくジュースにしたほかは、私たちと同じようにウィーン風かつれつと野菜サラダを食べ、デザートにケーキをとった。日本からの見舞い客が来たことで、マテーさんは幾分上気していた。向こうの席の小柄な老女は、珍しそうにこちらを眺めていた。窓からは木々の間に空が見える。雪がぱらついていた。こうして食卓を前にしていると、見舞いではなく、遠足の途中森のレストランに寄ったような感じである。食事の代金を払おうとしたが、先のユーゴスラヴィア人の女性は、これはフラウ・ドクトルが払うからかまわないと言った。

二階にあるマテーさんの部屋は、十畳位で、シュタ

インフェルトガッセの、三方に窓を通してウィーンの森の風景が室内に流れこんでくる部屋とは比べものにならないくらい簡素である。ベッドや古いテーブルや戸棚が、壁際に押し付けるようにして置いてあったが、かつてのマテーさんの部屋に配置されていた、ポプラの木を使った、木目の美しい机やソファ、その他の調度品は、そこになかった。部屋の壁を埋めていた書物もいまは見えなかった。戸棚と戸棚との間にできた空間に十字架が掛けられていて、広い壁には、初老の女性を描いたパステル画が掛かっていた。マテーさんのお母さんだという。シュタインフェルトガッセの家では見たことのない絵である。しかしテラスへ通じるガラス戸を開けて、小鳥たちのために餌をまきはじめたマテーさんは、昔のままであった。やがて、ガラス戸の向こうに、向かいの森から、彼女の小さな友人が飛んできて、彼女のまいた餌をついばみはじめた。ガラス戸のかたわらの肘掛け椅子に坐って、マテーさんはそれを見ていた。シュタインフェルトガッセから眺めるカーレンベルクは、アルプス山脈の北東における末端をなし、メーニヒキルヒェンはウィーンの南に位置し、同じアルプスの一部である。ここは山の森なかである。マテーさんはとうとう森のなかにやって来たわけである。

再びカフェに戻って、今度は私がコーヒーを注文したが、会話は新たな話題を見いだすのにしばしば苦勞するようになった。何か肝腎のことには触れることなく、時は過ぎていかんとしていた。ユーゴの女性に医者なことなどを聞いたが、町の医師がすぐ来てくれることになっているとのことだが、彼女の話も要領を得ない。ドイツ語のせいばかりでなく、彼女自身も詳しくは話したくないのか、分からないのか、肩をすくめることが多い。ふと思いついて、マテーさんに、マルコさんに手紙を書かれますかと尋ねた。オー、ヤーと答えて、大きな眼をぎょろりと剥いてしばらく考えた後、私の差し出したA4版の紙両面に、いつもの筆跡で書いた。その内容は、教え子からの便りと復活祭のために送られてきたケーキに対する感謝と、教え子の近況を問う文のあとに、このホテルでのよい待遇を挙げ、展覧会などに行けないのが残念で、ラジオがいまはその代用をしてくれているとある。あなたがたは遠いので来られないだろう。向かいの森から、鳥たちが訪ねてくる。そして今日は日本からの訪問で、大変うれしい、云々と。最後はマルコさんのお母さんへの挨拶

拶で締めくくられている。マテーさん健在という感じがあった。

今朝、このホテルに来るに、アスパングで列車を降りたのは、マルコさんが電話でユーゴの女性から聞いてくれた通りのコースをとったからだ。ところが、いまそのユーゴの女性は、メーニヒキルヒェンから乗ればよい、駅はすぐこの下だ、と言う。あとでこうしたこともマルコさんに話した。というのも、ウィーンを離れる前夜11時頃、マルコさんはわざわざ宿に訪ねて来て、そのときマテーさん訪問の次第を話す機会もあったからである。その際、マルコさんは自分たち教員がまだ見舞いに行っていないにもかかわらず、日本から来た私たちが訪ねたことに言及して感謝の言葉を述べたのだったが、ともかく、コースについては、電話に出た女性、つまりユーゴの女性のドイツ語がよく聞きとれずに、何度も繰り返し尋ねたのだが、と説明した。たしかに非常な遠回りをしたわけだが、しかしあの風の吹きつける雪山は印象的であり、森に囲まれたこの山中の「ホテル」に到達するにはむしろふさわしい経路だった。帰りは、メーニヒキルヒェンより4時の列車に乗ることにした。ウィーンに着くのは、この列車だと6時40分になる。

さて、本筋に帰らなければならない。マテーさんにどこか覚束ないものを感じながらも、あれだけの手紙の書けることを心から喜んだが、しかし彼女がつねに正常に自分を統御できるとはかぎらないことを、そのすぐあとで知らされることになる。それは父との経験から覚悟していないこともなかったが、現実にはそれを目の前にすると気持ちは圧せられる。

トイレに行ったはずのマテーさんが、なかなか戻ってこないのである。マルコさん宛の手紙をこちらが読んでいる間に、カフェを出て行って、もうかなりの時間になる。やがて老女がひとり階段を降りて来て、トイレに入ってしまった。マテーさんはどうしたのか。雪は止んでいるが、どんよりと曇り、森のホテルのなかには特に薄暗く感じられる。カフェのカウンターでは、土地の男がひとり腰掛けてユーゴの女性とおしゃべりをしている。なぜか急に、普通の人間の平凡な会話がこのホテルにはそぐわないのを感じた。私たちは二階に上がった。

マテーさんの部屋の戸は半開きになっていた。声を

掛けてなかに入ると、黒褐色の森の色がそのまま辺りを染めたような部屋のなかに、白髪を後ろで束ねた大柄の老女が、うつむきかげんに腰掛けていた。ガラス戸の外のテラスの手すりに、小鳥が一羽とまっていたらしい。はっと音もなく暗い森へ飛び立っていった。だが老女の目は、この森の友人の動きに向けられることはない。フラウ・プロフェッサー・マテーという私の呼び掛けに、こちらに向けられた顔には何の表情もない。しかし、私と目が会った次の瞬間、当惑の色が現われ、ややあって、同じその顔の内側から、なんとも言えない笑いが湧いてきて、蠟のように固い顔を崩していくのであった。それは私を認めた笑いであったのか。やはりマテーさんは「分からなくなっている」のか。彼女よりもっと症状のひどい父でも、訪れたひとと話すときは、その場に合うように言葉を用いている。マテーさんは見たところずっとしっかりしているが、にもかかわらず無意識のうちに見舞い客との状況に合わせて努力していたのか。不安定な内的状態のなかで。そして、ふっと暗闇へ戻っていったのだろうか。

さあ、下へまいりましょうかと言って、彼女の肩に触れた。冷たく固い感触が腕へと伝わってきた。椅子から立ち上がったマテーさんを二人で支えた。彼女の体重を全身に感じながら、ゆっくり歩いた。

駅は、ホテルのレストランの窓から見えた、向かいの小さい石の建物がそうだった。無人駅で、駅構内を区切る柵もない。駅舎とホテルとの間の空き地に積もった雪の上で、小さな鴨が二羽、のろのろと動いていた。列車が来るまでに数分あった。ホテルのレストランの窓際には、さっきからずっと、マテーさんが立っている。一緒に一階に降りた彼女は、私たちを駅まで送ると言ったが、むろん丁寧に断って玄関で別れの挨拶をしたのである。マテーさんは窓際にじっと立っている。よく見ると、二階の部屋でも窓のカーテンが少しわきへ寄せられて、こちらを眺めている。先程、食堂で私たちに関心を示していたお婆さんのようだ。二人の老女が、別々に、窓から、いつまでもこちらを眺めている。

〔ふじい ただし 横浜国立大学経営学部教授〕